

第 43 回日本臨床矯正歯科医会大会長野大会



臨床セミナー 1

術後 10 年以上経過した症例の臨床データを読み解く
— 骨格性 I 級不正咬合について —

学術委員会 稲毛滋自

Deciphering clinical data from more than a decade prognosis of active treatment for skeletal Class I malocclusion

Committee of Scientific Programs Shigeyori Inage

社会における矯正歯科治療の認知度は高くなってきました。それに呼応するかのごとく、動的治療で使用する安易な装置や画一的な治療法に関する情報が流布されているように思います。しかしながら装置や治療法は矯正歯科治療の一側面でしかありません。今後は予後とりわけ長期安定という視点から振り返って動的治療を評価し再構築すべきではないでしょうか。

そこで、2013 年 12 月より本学術委員会では前述の視点に立脚し、展示された症例の要旨の中から動的治療終了後 2 年以上経過のデータが全てそろっている 215 症例を対象として、計測項目のみならず診断・抜歯非抜歯・使用装置・結果考察などの記述部分から 59 項目から 77 項目の因子を設定して「症例の要旨データベース」（以下、データベースと略す）を構築し運用してきました。現在までに 437 症例がデータベースに登録されました。長野大会後さらに約 40 症例分のデータが追加される予定です。

2014 年 2 月、第 41 回東北大会では臨床セミナー「展示された症例から学ぶ その 1」で症例展示のカテゴリーを包括して解析した結果をまとめて報告しました。

2014 年 10 月、第 73 回日本矯正歯科学会大会においてデータベースから抽出した長期安定症例を活用して「日本臨床矯正歯科医会会員による長期安定症例から第一報 — ANB7.5°以上の骨格性上顎前突 5 症例 —」と題するポスター発表を行いました。

2015 年 2 月、第 42 回名古屋大会では臨床セミナー「展示された症例から学ぶ その 2 上顎前突の治療を顧みる」と題して、関連する論文とデータベースから抽出した上顎前突症例の臨床データを比較検討いたしました。

第 43 回長野大会では臨床セミナー「治療の質の向上のために — 蓄積された臨床データを読み解く —」と題して、2012 年 8 月に実施した会員アンケート「矯正歯科治療における抜歯非抜歯に関するアンケート その 2」で得られた、骨格性 I 級不正咬合について arch length discrepancy と抜歯非抜歯との関連を問うた設問に対する回答、並びに保定終了後 10 年程度経過の長期安定性と下顎犬歯間幅径の拡大や下顎前歯の傾斜移動量等に関する質問に対する回答と、データベースから抽出された骨格性 I 級不正咬合で動的治療終了後 10 年以上経過して安定している 10 症例に本会会員有志から供与された前述の条件に合致する 25 症例の臨床データと関連する論文とを比較検討し、私見をまじえてご報告いたします。

長期安定という視点から動的治療を評価し再構築するための一助となれば幸甚です。多くの会員にご臨席いただき、活発なご意見をお願い申し上げます。